詩篇 81 篇

0 指揮者のために。ギテトの調べに合わせて。アサフによる

A．賛美への招き

1 われらの力であられる神に喜び歌え。ヤコブの神に喜び叫べ。
2 声高らかにほめ歌を歌え。タンバリンを打ち鳴らせ。
六弦の琴に合わせて、良い音の立琴をかき鳴らせ。
3 われらの祭りの日の、新月と満月に、角笛を吹き鳴らせ。
4 それは、イスラエルのためのおきて、ヤコブの神の定めである。
5 神が、エジプトの地に出て行かれたとき、ヨセフの中に、それをあかしとして授けられた。
私は、まだ知らなかったことばを聞いた。

B．贖罪史の回顧

《a．エジプトからの贖い》

6 「わたしは、彼の肩から重荷を取り除き、彼の手を荷かごから離してやった。
7 あなたは苦しみのときに、呼び求め、わたしは、あなたを助け出した。
わたしは、雷(いかずち)の隠れ場から、あなたに答え、メリバの水のほとりで、あなたをためした。セラ

《b．律法の授与》

8 聞け。わが民よ。わたしは、あなたをたしなめよう。イスラエルよ。よくわたしの言うことを聞け。
9 あなたのうちに、ほかの神があってはならない。あなたは、外国の神を拝んではならない。
10 わたしが、あなたの神、主である。わたしはあなたをエジプトの地から連れ上った。
あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。

《c．律法の放棄》

11 しかしわが民は、わたしの声を聞かず、イスラエルは、わたしに従わなかった。
12 それでわたしは、彼らをかたくなな心のままに任せ、自分たちのおもんぱかりのままに歩かせた。
13 ああ、ただ、わが民がわたしに聞き従い、イスラエルが、わたしの道を歩いたのだったら。
14 わたしはただちに、彼らの敵を征服し、彼らの仇に、わたしの手を向けたのに。」

C．尚もイスラエルを養われる主

15 主を憎む者どもは、主にへつらっているが、彼らの刑罰の時は永遠に続く。
16 しかし主は、最良の小麦をイスラエルに食べさせる。
「わたしは岩の上にできる蜜で、あなたを満ち足らせよう。」

今日学ぶ詩篇 81 篇は、全体として「賛美」がテーマに置かれています。賛美はキリスト者の礼拝生活と密接なものであり、教会は 2000 年以上に亘って歌い続けてきました。その賛美のルーツはイスラエル史にあり、神の民は常に楽器を用い、聖歌隊を配置して、神に向かって歌声を上げてきたといえます。

タイトルの中に出てくる「**ギテト**」という言葉は、「ガテ」という地名に由来すると考えられています。ガテで用いられていた楽器名または旋律と理解することができるでしょう。本篇以外にも、８篇、84 篇にも登場する名称です。

１節には「**喜び歌え**」「**喜び叫べ**」という力強い賛美への招きの言葉があります。賛美は喜びをもって歌うべきものであることが思い出されます。人目を気にしたり、技巧重視になったりすることなく、純粋に神を喜ぶ思いが賛美となって溢れ出ることを忘れないようにしたいものです。古今東西、多くの賛美歌・聖歌が生み出されてきましたが、作詞者・作曲者がどのような思いでそれを作り、どのように歌ってもらいたいと考えていたかに思いを巡らせてみることも大切でしょう。

２節には「**タンバリン**」「**六弦の琴**」「**良い音の立琴**」と、様々な楽器が登場します。楽器の種類としては打楽器と弦楽器ですが、時は流れ、楽器は多様化し、現在ではオルガン、ピアノ、ギター、ドラムをはじめとし、電子楽器も充実した時代となりました。如何なる楽器を用いるにしても、礼拝に向けての準備がよくなされ、神に対してふさわしい音楽とはどのようなものであるかを考え続けなくてはなりません。

３節の「**角笛**」は、２節に出てきた楽器の役割とはやや異なります。この詩篇が作られた目的は「仮庵の祭」のためだったと言われています。「**新月**」すなわち「第七の月」の第一日に角笛が吹き鳴らされて祭が始まったのです（レビ23:23)。「仮庵の祭」とは、出エジプトの記念（レビ23:34)、イスラエルに律法が与えられたことを記念する祭でした（申命31:10-11)。

「**神が、エジプトの地に出て行かれた**」（５節）とは、エジプトのすべての初子を打つためであり、それはイスラエル民族を最終的に解放するための行動でした（出 11:4)。ここで敢えて「**ヨセフ**」という表現が使われているのは、ヨセフの好意によってイスラエル民族がエジプトに移住することができたという背景を考慮していると思われます（創世 45 章～)。

６～14 節は鉤括弧で囲われ、神がイスラエルの民に語りかけているという構図になっています。ここに頻出するのは「**わたし**」「**あなた**」という表現であり、両者の特別な関係をよく描いています。

まず６～７節では、エジプトでの苦役から解放された救いの御業と、その後の約束の地へ向かって進んでいく歩みが二つのポイントで表されています。「**重荷**」「**荷かご**」（６節）とは、エジプトで過酷な労働を強いられていた日々を思い起こさせる言葉です。また、「**メリバ**」（７節）とは、飲み水の不足をモーセに訴えた民のために、神がモーセに岩を打つよ

うにお命じになった出来事を指します（出 17 章、民数 20 章）。モーセが岩を二度打つと水がほとばしり出ましたが、この行為が神に対する不信と見なされてしまいます。「メリバ」とは「不平」を意味する言葉であり、モーセを含む民全体の不従順の代名詞のようになってしまいました。

８～10 節では、不従順な民に対して与えられた律法の恵みが思い起こされます。「**聞け**」（８節）という言葉は、申命 6:4 の「イスラエルよ、聞け」を反映しているでしょう。そして、９～10 節では十戒の第一戒が具体的に登場し、これはイスラエルに与えられた律法の全体を代表していると考えられます。10 節後半に出てくる「**あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう**」という表現は、雛鳥が一生懸命に口を開けて母鳥が運んできてくれた餌を食べようとしている情景を想像させます。神が母鳥の如く民に与えようとしているのは祝福であり、それは無制限に注がれ満たされ続けるものなのです。神を小さく見積もって「私が得られる分はこの程度だろう」などと考えてはいけません。預言者エリシャがイスラエルの王ヨアシュにアラムに勝利するための矢を「３回」ではなく「５回、６回」打つことを求めた言葉が思い起こされます（Ⅱ列王 13:14-19）。

11～13 節には、エジプトから贖われ律法まで与えられた民が、神の声に聞き従わなかったという残念な歴史が描かれています。神はその民を「**かたくなな心のままに任せ**」られた（12 節）と言われています。「放置される」ことは、罪を犯している者にとって、実は最も危険な状態なのです。誰も忠告してくれる人がいなければ、罪は常習化し、いつしかどっぷりと悪の道にはまり込んでいて、泥沼のようになってしまう可能性があります。神の警告のメッセージが聞こえているうちが幸いなのです。神の本音は常に民が向きを変えてご自身に立ち返ることです。13 節の内容は、滅びゆくエルサレムのために涙を流された主イエスのことばを思い起こさせます（マタイ 23:37）。

15～16 節では、罪深いイスラエルを尚も養われる主の恵みが描かれています。「**最良の小麦**」という表現は、イスラエルを豊かに養われる神の恵みの一部として出てくる表現です。

> **主はこれを、地の高い所に上らせ、野の産物を食べさせた。主は<u>岩からの蜜</u>と、堅い岩からの油で、これを養い、牛の凝乳と、羊の乳とを、最良の子羊とともに、バシャンのものである雄羊と、雄やぎとを、<u>小麦の最も良いもの</u>とともに、食べさせた。あわ立つぶどうの血をあなたは飲んでいた。**（申命32:13-14）

また、この箇所には「**岩からの蜜**」という表現も出てきて、神の恵みと無制限に与えることのできる資力をイメージさせます。主を信頼する者に対して、神は出し惜しみをすることがなく、良いものが何も存在しないような所（岩）からも良いもの（蜜）を引き出してくださるというのです。

このような恵み深い神に信頼して歩むところには、力強い賛美の歌声が溢れ出てくるでしょう。私たちの口から出てくる言葉はどのような質のものでしょうか。すべての不平が賛美に変えられていくことを祈り求めたいと思います。